

客論

地域支援コーディネーター 福永 栄子

ひな祭りの季節がやってきた。東京から移ってきたばかりのころ、「綾雛山まつり」を見て驚いた。いわゆる「奇習」である。家中へ案内され、座敷に入る。突然、目に飛び込んだのは、たたみ敷きにもなる大きな山。度肝を抜



祝う綾の古くからの風習である。九州中央山地の南東麓にあたる綾町。江戸時代は大半が薩摩藩の領地で、ひな山は薩摩藩の入野を中心にした長女の誕生を祝う風習として伝えられ、今に息づく。古くは紙人形を飾っていたようだが、鹿兒島の帖佐人形や佐土原人形など、

綾の「ひな山」に見る山文化

である大きな古木が配置され、その傍らには、跡継ぎを表す若木が立ち、女の子自身を表している。川は人生。渡来ものの自然素材は使わないのが原則。地域の草木で、それも、もうすぐ枯れそうなものを選ぶ。自然に神を見、畏敬の心を抱いている山文化の表れである。

自然素材を集めるのは「苦労

できる「ひな山」は、綾に伝わる喜ぶ文化である。その「ひな山」文化を使って、商店街のまちおこしをしようという立ち上がったのが綾町商工会の女性部。こうして今年で10回目を迎える「雛山まつり」が始まり、見事、来る人の心をとらえた。ひな山を商店街に飾り、人通りの減っていた通りに人を呼び返そうとい

われている。

どこに連れていかれるのか分からないからミニテリー。案内人の独断で、その日の参加者や天候、その人のつきあいなどによってコースが決まるからカリスマ。つまり、綾の喜ぶしの達人という意味。町観光案内所に朝10時前に訪れると誰でも千円で参加でき、予約も要らず、リピーターも多い。ひとつ、民家のひな山を訪れるとき忘れてはいけないことがある。神楽と同じでただのイベントではなく、家人にとっては娘のことやかな成長を祝う大切な祝いであるということ。一日、親せきになつたような気持ちで、共に祝ってみてはいかがだろうか。

かれた。木々や草、石と土。土の上をコケがぎっしりと覆っている。木花が咲き、ツクシが生え、水が流れている。見ると、山谷・川など自然の風景をひな壇に見立て、その中に溶け込むように雛人形が鎮座しているのではない。初めて見る雛飾りである。3月の節句に合わせて、その年生まれた長女を

土人形へと姿が変わり、今ではひな壇が飾られていることが多い。ひな山に使われる材料は、森の中などにある、人の手が加わっていない自然素材ばかり。生まれてきた女の子の一生を語るように、丁寧にひな山に創られる。では、なぜ山なのだろうか。実はここに九州中央山地独特の山文化の影響が見られる。ひな山には必ず、山の神

で、周囲の多くの人の手を借りながら、1年かけて集める。コケなどなかなか、手に入らないし、藤かずらも夏の間から目をつけておかないと見つけれないという。大切なのは、お金をかけてもできないという事。近隣のつながりやの薄い都会では、決してできない雛飾り。この地方独特のしきたり「結いの心」を持って、初めて

う試み。ふるまいなど、町の人の交流の場も用意した。ほんもの民家のひな山も見学でき、運がよければお祝いにも参加できる。毎年、大学生が熊須書塾店のひな山作りに参加するなど、話題も多い。特に今年初めて「カリスマ案内人」と行く「綾旅」という企画で、期間中毎日、工房と綾の喜ぶしをめぐるミニテリーツアーが行

ふくなが・えいこ 福岡県生まれ。上智大学外国語学部英語学科卒業。地域交流誌「みちくさ」編集長。県観光審議会委員。宮崎市。